（資料）

REFRANERO ESPAÑOL (30)
スペインの諺辞典

Bernardo Villasanz*(ed.)
新　井　藍　子**

1171. No se cogen (o pescan, o toman) truchas a bragas enjutas.
乾いたズボンでは　鱒（ます）は捕れない

— 鱒を獲るためには，川に入ってズボンを濡らさなければならないように，利益を得るためには，働いて苦労しなければならないということ。

— 同義の諺には“Bragas duchas comen truchas. 熟練したズボンが鱒を取る”（どんな仕事でも一人前になるためには、努力と年季が必要である—筆者の諺辞典，諺 150 を参照），“EL que quiera peces, que se moje el culo. 魚を取りたければ，尻を濡らせ”（同辞典，諺 150 を参照），“EL que sigue la caza, ése la mata. 狩りをする者が，獲物を捕る”（大きな成果を得るためには，根気がなくてはならない—同辞典，諺 506 を参照），“EL que sigue la liebre, ése la mata. 兎を追う者が，兎を捕る”（同辞典，諺 506 を参照）などがある。

— 例題 1：ドン・キホーテ，第二部 71 章，ドン・キホーテがサンチョに，ドゥルシネーアの幻術解きのムチ代が欲しければ，自分でムチをあててみよと，持ちかける、それに対するサンチョの返事が“..., y entraré en mi casa rico y contento, aunque bien

* Edición y revisión. Facultad de Humanidades. Universidad de Fukuoka.
** Profesora de español en la Universidad de Fukuoka (Facultad de Humanidades).

azotado; porque no se toman truchas..., y no digo más. そしたら，わしゃ金持ちになって，喜び勇んで家の敷居がまたげるだ。少々ぐれえ笞(むち)をくらってもね。なぜと言え，ずぼんも濡らさねえで鱒は捕れねえって言うだから。これで，わしゃ何もいうことねえよ。”（続編三，高橋正武訳）注：“...a bragas enjutas-no se adquiere ganancia sin trabajo-働かなければ，利益は得られない”（Martín de Riquer de la Real Academia, Volumen Ⅱ）

— 例題 2：セレスティーナ第 7 幕，カリストの従士の一人パルメノにいろいろ説教するセレスティーナ，そのうちの一つ，“..., que no se toman truchas, etc., 乾いたズボンじゃ鱒はつれないこと，...”（セレスティナ，大島正訳）注：“no se toman truchas a bragas enjutas-sin mojarse para pescarlas-todo requiere trabajo-ズボンを濡らさないで鱒は捕れない—あらゆることには苦労がつきものである”（La Celestina, Bruno Mario Damiani, Cátedra）

— ぴったり同義の日本の諺には“水に入らずして向岸に達せしためしなし”がある。

1172. No se ganó Zamora en una hora, ni Roma se fundó luego toda.

サモーラは，一時間で落城せず
ローマは，一日にしてならず

— 難しい大規模な企て，仕事には長い間の努力が必要であることをたとえて言う。

— スバルビィ（諺辞典）によると，サモーラ（マドリッドの北西，ポルトガルとの国境に近い，ドゥエロ川に臨む町—筆者）の住人が，彼ら自身で築いた城壁の砦に立てこもり，カスティーリャ王サンチョ二世の包囲（1072 年）に対して闘った戦闘を指す。

— イリバレン（格言の背景）によると，このサンチョ二世が包囲をしたとき，サモーラ人，ベリード・ドルフォスという者に暗殺されたが、その後も包囲は続けられた。大部分の作家の意見によると，この諺は，この 1072 年の戦闘のサモーラを指す，しかし，他方では，モーロ人からサモーラを奪回した時（893 年，アストュリアスのアルフォンソ三世によりサモーラは，奪回された—筆者）の戦闘を指すと言っている。そうするとこれはカスティーリャ語で書かれたもっとも古い諺の一つとなる。

— 例題 1：ドン・キホーテ第二部 71 章，ドン・キホーテの思い姫ドゥルシネーアの幻術解きのためムチ打ちを続けるサンチョに，これくらいでやめときなさい，“... ; que

no se ganó Zamora en una hora. サモーラも一時間では落城せなんだぞ。”（続編三，高橋正武訳）

— 例題2：セレスティーナ第6幕，惚れている娘に会いたいというカリストに諺を引用して忍耐を説くセレスティーナ，“...que en una hora no se ganó Zamora; pero no por eso desconfiaron los combatientes. サモーラは一時間では占領されなかったが、だからといって，戦士らは不信の念を抱かなかったのです。”（魔女セレスティナ，大島正訳）

— 後半の部分の“ローマは一日にしてならず”は，今日の日本でもよく知られている諺である。ここの〈ローマ〉は，古代ローマ帝国の象徴としての首都を指す。強大なローマ帝国が最大版図期になるまでには五百年の歳月を要した。“ことわざ辞典”（岩波）によると，“ことわざとしては中世ラテン語以来のもので，ことわざ集では，まず1881年に“羅馬（ローマ）ノ府ハ一朝ノ造営ニアラズ”が，1889年には“羅馬（ローマ）は一日にして建たず”とあり，1898年では“大業（たいぎょう）は一朝一夕にしてならず”という訳語をあてている，現在使われている定訳となったのは“諺語大辞典”（1910年）からのようである。”

1173. No se ha de exprimir tanto la naranja que amargue.
ジュースが苦（にが）くなるほど　オレンジをしぼるな

— 何事もやり過ぎると目的を果すどころか，反対に駄目にしてしまうので，ほどほどがいいというたとえ。（バロス）

— 意味は反対だが，同じような表現の諺が日本にもある，“百姓と油は絞るほど出る”（両方とも絞れば絞るほど出る），“茶と百姓は絞るほど出る”など。

1174. No se ha de nombrar la soga en casa del ahorcado.
首をくくられた者の家で　縄の名を言うな

— 人の災難，不幸を思い出させるような事を言ってはならないということ。（バロス）次の異表現“En casa del ahorcado no se ha de nombrar la soga. 絞首刑になった者の家では，縄の名を言うな”が，筆者の諺辞典，諺527で例題をあげてすでに解説してあるので，参照して下さい。

— “宝典”（コバルビアス）には，異表現で“En casa del ahorcado, no mientes la soga. 首をくくられた者の家で，縄の名を言うな”（被害を蒙ったり，侮辱を受けて

苦しんでいる者に再びその傷口をなめさせるような事に触れるのは，思慮が足りないというおしえ—コバルビアス）

1175. No se ha hecho la miel para la boca del asno.
蜜はロバの口にはあわぬ

— 本人にはふさわしくない価値あるものを高望みする者をたとえて言う。（バロス）

— 同義の諺には，“Este monte no es para asnos. この山は，ロバには登れぬ”（筆者の諺辞典，諺 591 を参照），“Echar margaritas a puercos. 豚に真珠”（同諺辞典，諺 461 を参照）などがある。

— 例題：ドン・キホーテ第一部 52 章，いつかは島の太守になれるという望みを女房に話しても，話しが通じないのでサンチョが女房をたとえて，“No es la miel para la boca del asno-respondió Sancho-; ...〈蜂蜜は驢馬の口にあわねえだ〉と，サンチョ。”（正編三，永田寛定訳）

— いわゆる“高嶺(たかね)の花”を欲しがる者に，たとえを用いてそれとなく，あなたには不釣合いですよ，と分からせるための諺。同義に“及ばぬ鯉の滝登り”（どんなに努力してもとうてい不可能なことのたとえ），“猫に小判”などがある。

1176. No se saca arador con pala ni azadón.
寄生虫は　鍬の刃では　引き出せない

— 方法が間違っていれば，欲するものを手に入れられない。（スバルビィ）適切な方法を取らなければ，目的を達成できない。（バロス）

— 次の異表現がコレアス諺集に，“No se saca arador a pala de azadón. 同訳”，“No se saca arador a pala y azadón. 同訳”，また，スバルビィ諺辞典には“No saca arador con pala de azadón. 同訳”，“No se saca arador con pala ni azadón. 同訳”が，収載されている。同義の諺には“Pedir peras al olmo. 楡(にれ)に梨を求める”（できないことを望む，或は，方法が間違っているので，目的を達成できない）が，また，類義の諺には“No saques espinas donde no hay espigas. 穂がないところでとげを抜くな”（成果が得られないところで働いても無駄である—バロス）などがある。

— “arador”とは，“arador de sarna-ヒゼンダニ”

— 例題：セレスティーナ第1幕，カリストの従者の一人が他の従者を指して，こんな厄介な問題をさばこうと考えているんだから，まるで“..., que es pensar <sacar aradores a pala de azadón>. No lo puedo sufrir. あいつは鋤や鍬で疥癬虫がほり出せると思っていやがるんだ。俺はじっとしてはおれないのさ。”（魔女セレスティナ，大島正訳）

— 標題の諺と表現が類似しているのは“杓子は耳掻きにならず”（大きい物は､必ずしも小さい物の代わりになるとは限らない），“長持は弁当箱にはならぬ”などがある。方法が間違っていれば，目的を達成できないという意では，“畠に蛤山に蛤を求む”，“天に橋を架ける”などがある。

1177. No sólo de pan vivirá el hombre.
人はパンだけで生きるものではない

— 上記の言葉に“神の口から出る一つ一つの言葉で生きる”という言葉が続けられる。

— マタイによる福音の有名な言葉である（マタイ4・4・5）。イエスは“霊”に導かれて荒れ野に行かれ，四十日間断食した後，空腹を覚えられた。すると，悪魔が来て，“神の子なら，これらの石がパンになるように命じたらどうだ”とイエスに言った，それに対してイエスがお答えになった言葉が見出しのそれである。

— イエスが宣教活動を始める前の荒れ野での悪魔の誘惑を退ける試練が，マタイ4の1から11まで述べられている。聖書の中で40という数（四十日間が四旬節の原型）は，試練や苦しみのシンボルとなっている。また，“人はパンだけで.....”のイエスのお言葉は，モーセがイスラエルの民に命じた次の言葉（旧約聖書の申命記8－3－4）の引用である，〈人はパンだけで生きるのではなく，人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった〉。この箇所は，モーセがイスラエルの民をエジプトからひきつれて，四十年間，イスラエルの荒れ野を旅したことを思い起こさせるために語られたお言葉（申命記8‐1‐10）の中にある。

— 例題：セレスティーナ第4幕，聖書の言葉を引用して，人のためなら断食も厭わぬと，ぬけぬけとメリベア相手に喋るセレスティーナ，“¿Y no sabes que por la divina boca fue dicho, contra aquel infernal tentador, <que no de sólo pan viviremos?> ... 吾人はパンのみにて生きるものにあらず，とは聖なる口によって，あの地獄の誘惑者に対して，言われたということを，ご存じではありませぬか？”（魔女セレスティ

ナ，大島正訳）

1178. No son todos los tiempos unos.
全ての時は　移りゆく

— 人生の有為転変を謳っている。
— スバルビィは，われわれを取りまいている環境は，刻々と変わっていくと言う。
— 例題 1：ドン・キホーテ第二部 35 章，ひとりの従士に頼むのではなく，ひとりの太守に頼むやり方を覚えるがいいと，サンチョが至極もっともなことを言う，“...; que no son todos los tiempos unos, ni están los hombres siempre de un buen humor. 天気だって変わらずにゃいねえように，人間も上きげんでばかりはいねえだ。”（続編二，永田寛定訳）
— 例題 2：ドン・キホーテ第二部 58 章，道中で十数人の百姓ふうの男たちに出くわしても，痛い目に会わなかったサンチョは感嘆して，これまでの遍歴の旅の中でもいちばんおだやかで，おとなしい冒険だったと言う，それに対し，ドン・キホーテ“...; pero has de advertir que no todos los tiempos son unos, ni corren de una misma suerte, ...しかしな，覚悟しておかねばならぬのはな，いつもこの調子で平穏無事にまいるとは，かぎらぬということじゃ。”（続編三，高橋正武訳）
— 今日のわれわれが昨日のわれわれとは異なっているように，われわれがどっぷりとつかっているこの世のありさまも刻々と移り変わって同じところには留まっていない。“有為転変（ういてんぺん）の世の習い”（太平記），“諸行無常（しょぎょうむじょう）”（涅槃経（ねはんぎょう）），“世の中は三日見ぬ間の桜かな”などが類義のことわざである。

1179. No te hagas mandador donde no fueres señor.
主人でないところでは　命令するな

— よその家で差しでがましい行為をしたり，命令したりすべきではない。（バロス）持ち主でなければ，所有物を自分勝手にどうこうする権利はないように，どんな役割ももたないところで，ボスのように振る舞う行為を戒めている。（スバルビィ）
— 他人のことに干渉するな，お節介するな，余計な口出しをするなという意の類義の諺には“Cuida de tus duelos y deja los ajenos. 自分の頭の蝿を追え，他人のことに干渉するな”（筆者の諺辞典，諺 362 を参照），“Cuidado ajeno, cuelga de pelo. 他

人の世話やきは，一本の毛にぶらさがっている”（同辞典，諺 363 参照），“Cuidados ajenos matan al hombre bueno. 他人のおせっかいは，お人好しを殺す”（同辞典，諺 364 を参照）などがある。

1180. No templa cordura lo que destempla ventura.
運が強いと　思慮が弱まる

— 幸運な風が吹いて人を楽々と運んでいくと，ほどほどのところで抑制がきかなくなるということ。（バロス）

— 人というものは，何もかもが良い時には，調子に乗りすぎる傾向がある，たとえそういう順風満帆（まんぱん）な時でも分別を忘れないようにと教えている。何故なら，“十分はこぼれる”のがこの世の習いであるから何事もほどほどに欲張らないほうがよいということ。

1181. Nuestros padres a pulgadas y nosotros a brazadas.
われわれの両親は　少しずつ
われわれは　ぱっぱか　ぱっぱ

— 親は少しずつ金を貯え，子供らはその金をぱっぱかぱっぱと使う。（バロス）親というものは，苦労を重ね，不自由を忍んで金を稼ぐが，相続人は短期間に譲り受けたものを浪費する。（スバルビィ）

— 同義の諺には“Ganan buenos para ruines herederos. 長者に二代なし”（筆者の諺辞典，諺 611 を参照）がある。

— “長者三代”，“売り家と唐様で書く三代目”，“名主の跡は芋畑”など，どこでも親が苦労して貯めた財産を子孫がなくしてしまうのは同じであるらしい。故に，初めから“児孫（じそん）の為に美田を買わず”（西郷隆盛・偶成）という親もいる。財産を残して子孫を甘やかすよりは，苦労させて自立した人間になってもらいたいという親の願いが滲みでている詩からとった諺である。

1182. Nueve meses de invierno y tres de infierno.
九ヶ月の冬　三ヶ月の地獄

— スペインの中央部，北部にまたがるカスティーリャ地方の気候は厳しく，九ヶ月間は

冬のように寒い日が続き，三ヶ月間は暑い夏が続くということ。筆者は，スペインの中央に位置する首都，マドリッドに住んでいたことがあるが，マドリッドは，日本の東京と同じような気候で四季がちゃんとあり，春は暖かく，秋は爽やかで過ごし易く，諺が謳っているような冬と夏だけではなかった。カスティーリャ地方といっても広いので山間部などはこのような気候であろう。“Enero y febrero hinchen el granero con su hielo y aguacero. 一月と二月の氷とにわか雨が，穀倉をいっぱいにする”（筆者の諺辞典，諺 545 を参照）という諺もある。

— “暑さ寒さも彼岸まで”という諺があるが，近頃は，日本の都市では，春，秋が短く，寒い日と暑い日ばかりが長く続くように思われる。地球を取りまく環境が悪化していくにつれて気候にも異変が起っているようである。

1183. Nuevo rey, nueva ley.
新しい王に，新しい法律

— どんな組織でも，そこのトップが変われば，全て改変されるということ。“A rey muerto, rey puesto. 死んだ王の後に，新しい王”（筆者の諺辞典，諺 93 を参照）というよく知られている諺があるように，空いた地位はすぐ，他の新しい人に占められ，そこに新しい構想，新しい人間関係が生じ今までとはがらりと変わってしまう。そして，そこにもとからいる人々は，いやおうなく新しい環境に適応していく他ないのである。

1184. Nunca digas que llueve hasta que truene.
雷が鳴るまで　雨が降るとは　決して言うな

— どんな事でも確実であると分かるまでは，保証すべきではない。（バロス）

— 他人に対して安請け合いはするなということ。どうせそれを実行する気がない人ほど気楽に引き受ける傾向があるものである。後で人にその事を促されても当人はすっかり忘れていることがしばしばある。

1185. Nunca el lobo mata al lobo.
狼は　別の狼を　決して殺さない

— 悪者は悪者同士傷つけ合うだけではなく，互いに守り合うものでもある。（バロス）

— 類義の諺が，いくつか次のようにある；“Nunca el perro muerde a la perra. 雄犬は，決して雌犬にかみつかない”（コレアス諺集），“De cosario a cosario, sólo se pierden los barriles. 海賊船が，互いに戦っても，なくなるのは樽ぐらい”（同類の悪党が互いにけんかをしても，本気にはならない。筆者の諺辞典，諺 384 を参照），“El diablo a los suyos quiere. 悪魔は同類を好む”（同辞典，諺 404 を参照）など。

— “同じ穴のむじな”とか“同じ穴の狐”などの同類同士は，ふつう互いに傷つけ合わないということ。

1186. Nunca es tarde si la dicha es buena.
喜びごとに　遅すぎるということはない

— 幸せはどんなに遅く来ようとも，いつでも歓迎されるものである。（スバルビィ）

— 同義の諺には“Aunque el bien más se dilate, como se alcance no es tarde. 幸運はどんなに延期されようとも，来るなら遅いということはない”（筆者の諺辞典，諺 108 を参照），“Más vale tarde que nunca. 何もないより，遅いがまし（遅れてするほうが，しないよりまし）”（同辞典，諺 902 を参照），“Más vale año tardío que vacío. 晩熟の年は，凶作の年に勝る”などがある。

— 日本には，幸運は気長に待つものであるの意の“果報は寝て待て”，“運は寝て待て”，“待てば海路の日和あり”などがある。

1187. Nunca faltan rogadores, para eso y cosas peores.
仲裁は時の氏神

— 争いごとが起こり，窮地に立たされたような場合には，いつでも仲裁をしてくれる人はいるものである。

— 例題：セレスティーナ第 4 幕，恋しているカリストのためにメリベアにかけ合いにいくセレスティーナは、そのために何らかの罰を受けるのではないかと怖れている，“... ¡Esfuerza, esfuerza, Celestina! ¡No desmayes! Que nunca faltan rogadores para mitigar las penas. 元気をお出し，元気を，セレスティーナ！お前，おじけづいちゃだめだよ！罰を軽くするために代言人だって，ないわけじゃないんだからさ。”（魔女セレスティナ，大島正訳）

— 見出しの訳に用いた諺と同義のそれには“挨拶は時の氏神”，“地獄で仏”などがあ

る。スペインの諺より日本のそれの方がより意味が深く，“争いごとが起こった時，間に入って仲裁をしてくれる人は，ありがたい氏神様のような神だから，その人の調停に素直に従うのがよい”と教えている。

1188. Nunca falta un roto para un descosido.
破(わ)れ鍋に欠け蓋

— だれにでもその人に似合った結婚相手がいるものであるの意で，“破(わ)れ鍋に綴(と)じ蓋(ぶた)”とも言い，日本ではこの方がよく使われている。

— スペインの同義の諺には“No hay olla tan fea que no halle su cobertera. 破れ鍋に綴じ蓋”（筆者の諺辞典，諺 1137 を参照），“Para cada altar hay su frontal. どんな祭壇にも似合った掛け布”（同諺辞典，諺 1257 を参照）がある。ちなみに，見出しの諺の直訳は“布のほころびには似合いの破れ”であり，同義の諺のほうは，日本のそれと同じく，“鍋と蓋”の組み合わせで直訳は“こんなに汚れた鍋にも合う蓋がある”。

1189. Nunca llueve a gusto de todos.
皆の好みに合わせて
雨が降るわけではない

— 同じ事でも，ある人には気に入ったり，都合がよかったりするが，他の人には害を与えたり，気に入らないことをたとえて言う。（バロス）

— 同義の諺には“Lo que uno no quiere, otro lo desea. ある者が望まないことを，別の者は望む”（筆者の諺辞典，諺 774 を参照），“Lo que uno desecha, otro lo ruega. ある者が捨てるものを，別の者はねだる”（同諺 774 を参照）などがある。

— 類義の日本の諺には“彼方(あちら)立てれば此方(こちら)が立たぬ”“あなたを祝えばこなたの怨み”などがある。こちらは，利害の対立する両者の板ばさみになる状態を言い表しているが，スペインのそれには，そういう意味はなく，単に一方には良くても，他方には悪いという利害の対立をたとえている。

1190. Nunca más perro al molino.
羹(あつもの)に懲(こ)りて膾(なます)を吹く

— 前に酷い目に会ってこりごりしたので，すっかり臆病になり，用心深くなること。
— 直訳は，“懲りた犬は絶対に風車に近づかない”で，コレアスによると，“風車をなめようとした犬が，羽に打ちのめされたように，前の失敗で酷い目に会いこりごりした人々が口にする諺”。
— 同義の諺には“De los escarmentados nacen los avisados. 懲りた者は，用心深くなる（羹に懲りて膾を吹く）”（筆者の諺辞典，諺 394 を参照），“El escarmentado bien conoce el vado. 懲りた者はよくなす術をわきまえるようになる”（同諺 394 を参照）などがある。
— 見出しの訳の諺の他にも同義で“水に懲りて湯を辞す”，“蛇に噛まれて朽ち縄に怖じる”，“黒犬に噛まれて赤犬に怖じる”など，こちらのほうが，たとえの表現が誇張されている。失敗に懲りて非常に臆病になった者がばかばかしいほどの用心をすることを強調している。これらの諺により近いスペインの諺には“Gato escaldado, del agua fría huye. やけどした猫は，水からも逃げる”（筆者の諺辞典，諺 614 を参照）がある。
— 例題：セレスティーナ第 2 幕，カリストの忠実であった従者のパルメノは，忠実故に主人に耳の痛い忠告をし，逆に主人から悪く言われ，こりごりする，“..., pues dicen:<a río vuelto ganancia de pescadores. ¡Nunca más perro a molino!> 乱れに乱れたところで漁夫の利を占める，ということもあるからな。みすみすへまは金輪際せぬわい！”（魔女セレスティナ，大島正訳）

1191. Nunca mucho me costó poco.
すごいことには　すごい努力

— 大事業をなしとげるには，大変な労力，時間，費用がかかる。スバルビィによると，一銭も金をつかうことなしに，何かを手に入れようとするのは不可能だし，馬鹿げているという意。
— 同義の諺には“No se ganó Zamora en una hora, ni Roma se fundó luego toda. サモーラは，一時間で落城せず，ローマは，一日にしてならず”（筆者の諺辞典，諺

1172 を参照）がある。難しい大規模な企て，仕事には長い間の努力が必要であることをたとえている。

— 例題：セレスティーナ第 8 幕，カリストの従者二人が女を評して，“En tanto son tales tenidas, cuanto caras son compradas; tanto valen, cuanto cuestan. Nunca mucho costó poco. 女というものは値打ちがあればあるだけ，買値も高くなるもんだ。価値があればあるほど，値段もつり上がるわけさ。俺のあの女の場合を除いては，ものはみな相当の値段がしたもんよ。”（魔女セレスティナ，大島正訳）

— 見出しの諺の“costar”には，“（費用として金が）かかる，（金額を）要する，（労力，時間などを）要する，骨が折れる，などの意味がある”

1192. Nunca ninguno diga por sí: bien estoy.
誰も　自分はとても満足していると　言うな

— 人というものは，常にもっと成功したいという期待を抱くべきである。（バロス）

— 現状に満足するのでは進歩が止まってしまう，もっと上を目指すべきであるという上昇指向を諷うことわざである。

— 立身出世し，栄達することを“鯉の滝登り”，“竜門の滝登り”などと言う。年が若ければ，おおきな望みを抱くのも当然であろうと思われるが，現在では，“青年よ，大志を抱け”という言葉も死語になってしまっている。

1193. Nunca peligro sin peligro se vence.
危険を冒さぬ者は　決して勝てぬ

— 危険を冒さなければ，大きな目的を達成できない。

— 反対の諺には“El que ama el peligro, perecerá en él. 危険を求むる者は，危険に死す”（筆者の諺辞典，諺 465 を参照），“Quien busca el peligro, perece en él. 危うきを求むる者は，危うきに死す”（同諺 465 を参照）などがある。

— 例題：セレスティーナ第 10 幕，恋に苦しんでいるメリベアにセレスティーナはくどくどと更にその恋を煽るようなことを言う，“Y dicen los sabios que la cura del lastimero médico deja mayor señal y que nunca peligro sin peligro se vence. 危険というものは危険がなくては，決してのり越えられないものだと学者先生がたも言っておられます。”（魔女セレスティナ，大島正訳）

— 類義の諺には“虎穴に入らずんば虎子を得ず”，“枝先に行かねば熟柿は食えぬ”，“危険を冒さぬ者は何も得られぬ”，“危ない橋も一度は渡れ”などがある。冒険をしなければ何も得られない，目的を達成することはできないということ。

1194. Nunca pidas a quien tiene, sino a quien sabes que te quiere.
持っている者に　ねだるのではなく
好いてくれていると　君が思っている者にねだれ

– 人に何かを上げるのは，あり余っているからではなく，好意とか愛情からであるということ。
– 類義の諺には“No te hagas pobre a quien no te puede hacer rico. あなたを金持ちにしてくれない者に，貧乏人を装おうな”（援助をしてくれそうもない者に，貧困とか生活苦を語るなと忠告している。），“Más de quien bien quiere que quien puede. 本当にしたい者ができる者よりくれる”（筆者の諺辞典，諺 836 を参照）などがある。また，次のように反対の諺もある；“Más da el duro que tiene, que franco que no tiene. 金持ちのケチのほうが，貧乏な気前のいい者よりくれる”（同諺 836 を参照），“Más da el duro que el desnudo. ケチのほうが丸裸よりくれる”（同諺 836 を参照）
– 困窮した者が誰かに救いを求める場合，誰でもいいというわけにはいかない，金を持っている者にではなく，好意をもってくれている者に，と見出しの諺は言う。

1195. Nunca vi abril que no fuera ruin, ora al entrar, ora al salir.
四月はさんざんな月である　入ってくるときも去っていくときも

– 四月はとても不安定な月で予想がつかないということ。
– 次の一連の四月に関する諺を見ると，どんな月かがよく分かる；“Por abril, aguas mil. 四月，千の雨が降る”（この月の雨は，パンとか植物のために欠かせない－コバルビアス，宝典），“Marzo ventoso y abril lluvioso, sacan a mayo hermoso. 風の三月，雨の四月が五月を美しくする”，“Las mañanicas de abril buenas son de dormir. 四月の夜明けは，眠るのに心地よい”（脳血管のめぐりをよくするのでとても眠たくなる－コバルビアス，宝典），“Abriles y condes, los más traidores. 四月と伯爵が，一番の裏切り者”（四月はとても不安定な月で，気温が急激に下がると，

収穫物を台無しにする，また，伯爵は国土回復戦争（レコンキスター 711 年から 1492 年，イスラム教徒により占領されたイベリア半島をキリスト教徒の手に奪回する戦い）の時に，国境の要塞にいて，しばしば己の都合によりどちらかの側についたり，離れたりを繰り返していたので信頼することができなかった－バロス諺集），“Abril frío, mucho pan y poco vino. 寒い四月，たくさんのパンと少しのワイン”，“Abril y mayo, la llave de todo el año. 四月と五月は，その年の鍵となる”（この頃に果物が実るので，収穫量はこれらの月の天候による－バロス諺集），“Por abril, corta un cardo y nacerán mil. 四月頃，カルド（食用の草）を一本刈ると，千本生えるだろう”，“Por abril duérmese el mozo ruin y por mayo, el mozo y el amo. 四月は悪ガキの小僧が眠り込み，五月は，小僧と主人も”（どちらの月も居眠りするのに適している），“Por abril no te descubrir. 四月は，（上着を）取るな”（まだまだ寒い），“Obispos y abriles, los más son ruines. 司教と四月はどうしようもない”（教会に対する痛烈な批判－筆者）などがある。

－ 日本でよく用いられているのは“春眠暁(しゅんみんあかつき)を覚えず”（春の夜は短い上に，暑くもなく寒くもなくとても寝心地がいいので，夜が明けたのも気づかずにぐっすり眠りこんで目が覚めない），“春宵一刻値千金(しゅんしょういっこくあたいせんきん)”（春の夜は気候が温暖で心地良く，そのすばらしい興趣は，短い時間が千金にも値する），“暑さ寒さも彼岸まで”などであろうか。三月は“三寒四温(さんかんしおん)”などと言われているように，まだまだ寒の戻りが度々あるが，四月になると本当に春らしい温かい陽気になり，夜だけではなく，日中もついうとうとしてしまう。